

やまがたじょうさんのまるあと  
山形城三の丸跡第10次発掘調査説明資料

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成24年7月21日

調査要項

遺跡名(番号) 山形城三の丸跡(県番号201-002)  
所在地 山形県山形市香澄町  
時代・種別 近世・城館跡  
起因事業 平成24年度福祉相談センター機能強化推進事業  
調査依頼者 山形県子育て推進部子ども家庭課  
調査機関 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター  
現地調査 平成24年5月14日から7月27日まで  
調査面積 900㎡  
調査担当者 調査研究員 天本昌希(現場責任者)  
調査員 齋藤和機

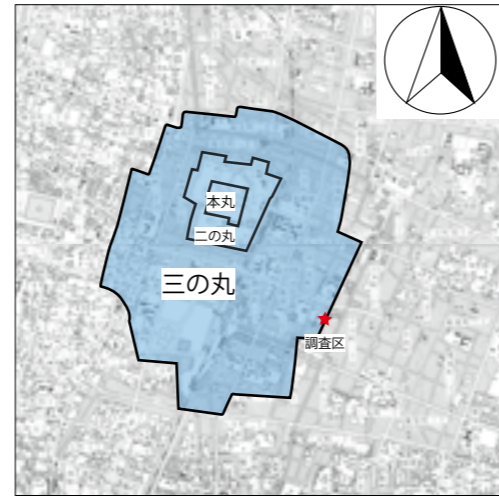


図1 遺跡位置図(1/50,000)

調査成果(7月21日現在)

検出遺構 近世・近代:堀1、土坑1 出土遺物 近世・近代:陶磁器、木製品ほか

1 調査の概要

山形市の霞城公園は、山形城跡として広く市民に知られていますが、かつての山形城は、公園の敷地内だけでなく、駅前を中心市街地一帯まで城内に含んでいました(図1)。この山形城は、最上義光の時代に整備され、本丸を中心に二の丸、三の丸と、堀と土塁で区切られた空間が同心円状に広がる構造をもち、江戸城に次ぐ東日本最大級の広大な城郭を誇っていました。しかし、江戸時代が終わり明治になると、山形城の土地は売却され、城の一番外側の三の丸は市街地に組み込まれて行きます。その際に堀や土塁は整地され、三の丸跡は、現在の「香澄町」という地名にそのなごりをとどめるのみとなります。

今回は、保健福祉センターの建設に先立ち発掘調査を実施しました。この場所は、市街地中心部であり、現在の村山保健所として利

用される前から、学校など様々な施設が建てられてきましたが、それらの建物の基礎の下から失われた三の丸の外堀跡を発見しました。これまでの三の丸の発掘調査は、山形駅西口の再開発や112号線の拡幅工事など複数回にわたって行われていますが、外堀の調査事例は、そう多くはありません。

2 見つかった遺構と遺物

今回の調査範囲は、すべて外堀と土塁のあった場所にあたり、城内外の屋敷地は、範囲外になります(図2)。土塁はすでに削平されて残っていませんが、調査区の北側に隣接する県営アパート敷地内の盛り土は、土塁の一部が残存しているものと思われます。今回の調査で発見した外堀は、調査区内だけでも幅10m以上あり、さらに東側へ広がります。調査できた西側のへりを見ると、底から急激に立ち上がり、その深さは4m数十cmに

達します。堀には並行して土塁がつくられていましたから、土塁の上から堀の底までは、相当の高低差があったことでしょう。堀の底面や斜面からは、20~50cm大の川原石が凸凹に出てきます(写真3)。調査区一帯は、馬見ヶ崎川の扇状地にあたり、川原石は土中から大量に採集できますが、このように特定の場所からまとまって存在するということはありません。敷き詰めたというには、あまりにも不規則ですが、人為的なものと解釈できるでしょう。

この外堀がどのように埋まっていったかを調べると(写真6)、一番下の9層は、腐植物を大量に含んだ粘土質の土が水平に堆積しており、一度に埋めたものではなく、自然に少しずつ埋まっていったものと思われる。

これに対して、上の5層からは、焼けた木材などと共に、大量の遺物が出土しており、火事などで焼けてしまったものを、まとめて堀に廃棄したようです(写真11)。その上に砂地の4層を挟んで、大量の遺物を含む1層があります。これら5層や1層の堆積状況は、人為的な埋戻しといえるもので、外堀の埋没過程は、一度にすべて埋め立てられたのではなく、各層ごとに時間差があるようです。

この時間差を測るために、各層からの出土遺物を見てみましょう。一番下の9層からは、ほとんど遺物は出土しませんでした。これは外堀を機能させるため、ゴミなどを捨てさせなかった、あるいは定期的に清掃などをしてきたのかも知れません。それでも一部から初期伊万里と呼ばれる1600年代前半の

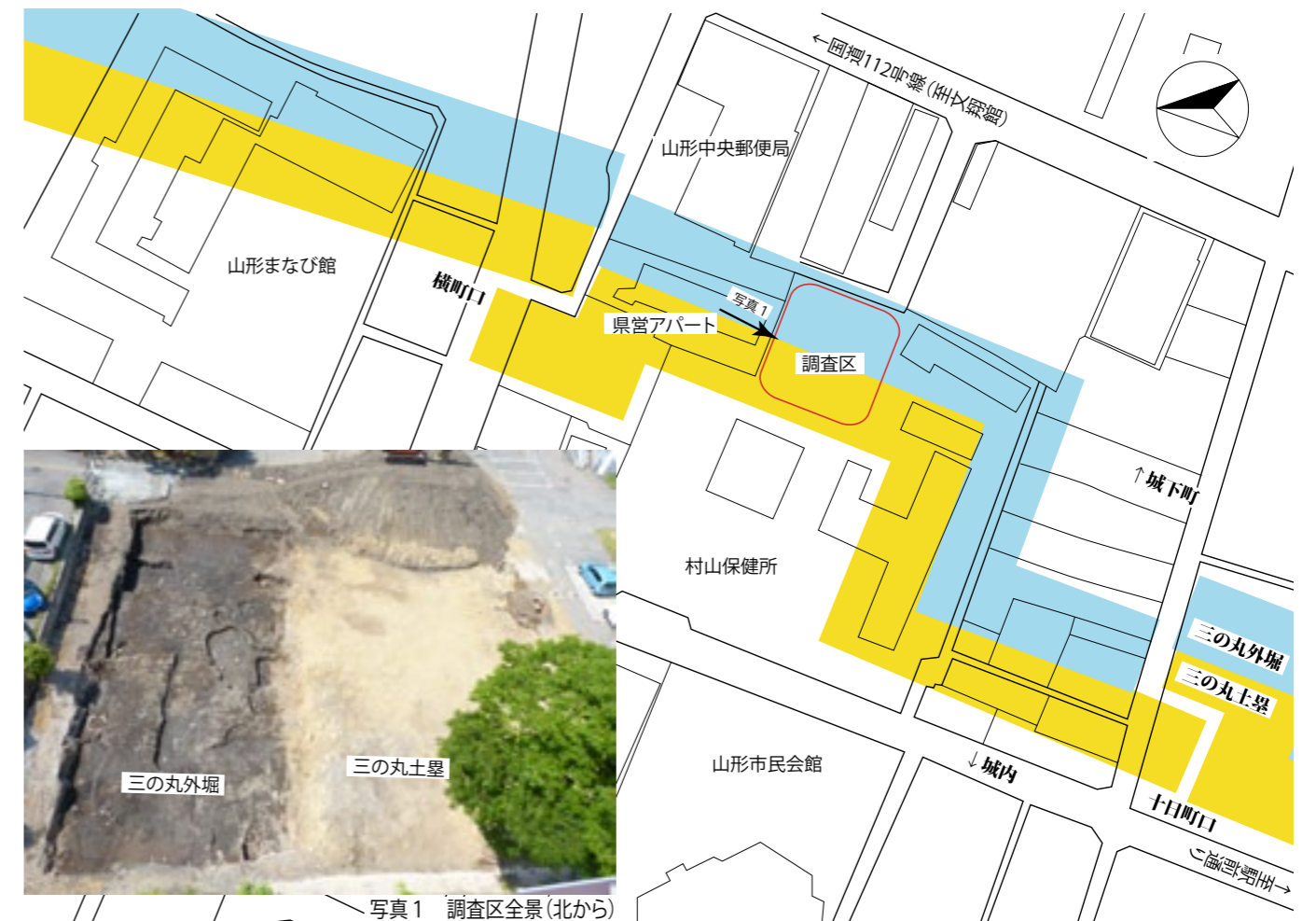


写真1 調査区全景(北から)

図2 調査区周辺の三の丸外堀・土塁推定図

陶磁器がまとまって出土しています（写真7・8）。これは三の丸を整備した最上義光の時代に近いもので、外堀がつくられた時代を示す資料といえるでしょう。

火事の廃棄物層の5層からは、大量の遺物とともに、「明和九年…六月」と記された木材が出土しています（写真10）。この内容や用途は、まだわかりませんが、明和9年とは、1772年のことで、これが書かれた後、火事が起こり廃棄されたのでしょうから、火事の時代の上限を示す資料といえます。山形市内の火事の記録は、数多く伝えられていますので、この火事がいつ頃のもののなのか、他の遺物の詳細な年代を調べ、記録と照合して行くことで明らかになるかも知れません。

また、一番上層の1層からは、明治時代の

末に盛んにつくられた平清水焼のインク瓶や、同じ模様の陶磁器がセットで出土しています。これらは外堀の整地に伴い、廃棄されたものと考えられます。

### 3 まとめ

今回の調査によって、三の丸外堀の構造が明らかになり、そこから大量の出土遺物を得ることができました。今後はこれらの出土遺物を詳細に検討することで、文献には記されることのない山形城下の人々の日常の姿が見えてくることでしょう。また、外堀がつくられた年代や、埋め戻された年代も明らかになるかもしれません。今回の調査の報告書は、今年度中に刊行予定であり、今後の整理作業の進展が期待されます。



写真2 調査前の状況



写真4 作業風景 (5/24)



写真3 堀底、壁面の川原石検出状況



写真5 作業風景 (6/25)

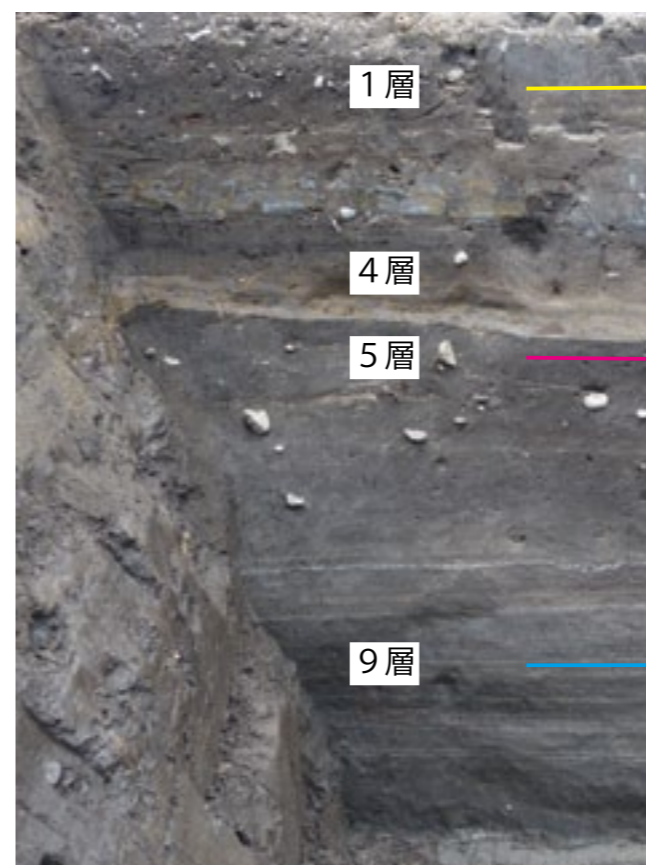


写真6 三の丸外堀土層堆積状況



写真7 初期伊万里出土状況



写真8 初期伊万里出土状況

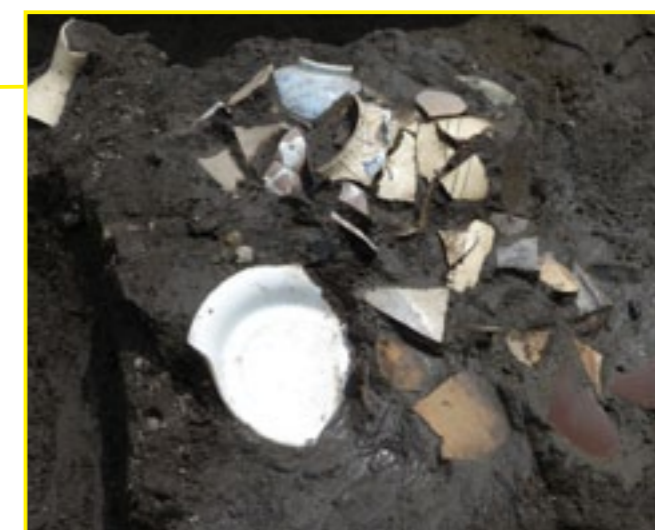


写真9 1層遺物出土状況



写真10 「明和九年」木材



写真11 火災廃棄物出土状況

明和九年  
きよし大？  
壬辰六月